まちづくりネットワーキングえひめ

舞たうん

VOL.84

2005.4

アングル
飛騨古川「ひとづくり　まちづくり」の観光協会
岐阜県飛騨市　古川町観光協会　会長　柴田　駿一……1
特集　「まちなみ・むらなみ」～景観、暮らし、物語～
にぎわいと和みの参道へ　四国中央市／篠永　二郎……2
わがまち、三津浜の財産を生かして賑わいを創造していく　松山市／秋山　義勲……4
まちなみ歩きで再発見　八幡浜市／大上　昭……6
フォーラムUWAUMI～宇和海の魅力を探る～　宇和島市／橋本　眞年……8
愛媛のまちなみ・むらなみ……10
キラリ光るまち
まちの木造駅舎を窓口に都市と田舎の交流を　栃木県今市市／柴田　智子……14
論談ーまちづくりー
「棚田百選」をどう活かすか？　ー中山間地域活性化の具体策ー
島根県立大学／井上　厚史……16
若者とまちづくり
第四回　大学生とまちづくり　伊予市／若松　進一……18
トークナウ　「まちづくり」としての町並博　町並博推進課イベント推進室／石丸　隆雄……20
その“まち”が好きだから　ちょい×こみネットワーク／白石　昌弘……21
媛のかわら版
おイネさんドイツへ行く（VOL.2）　松山市／戒田　節子……22
MY　TOWNうぉっちんぐ　歩き目デス＆足ラテス
西条モダニズム建築見て歩き　岡崎　直司……24
研究員卒業レポート
魅力あるいい地域へ向けて　梅村　裕治……26
information　センターからのお知らせ……28
媛のくにフラッシュ……30

特集
「まちなみ・むらなみ」
～景観、暮らし、物語～

「まちなみ」や「むらなみ」は、なぜ美しいと感じるのでしょうか？

先人の暮らしや叡智、文化や産業などのまちの息づかい、長い月日をかけ自然が創り出した造形など、ぬくもりある郷愁の物語が、今なお綴り続けられているからではないでしょうか。

また、時代の大きな潮流に流されることなく、自分たちの「まちなみ」や「むらなみ」をそれぞれが常に意識し続けるということ、守り伝えていくがために行動し続けるということが、いかに困難であるか想像に難くないからこそ、羨望や憧憬といったレンズを通して「まちなみ」や「むらなみ」に人は酔うのではないでしょうか。

かつてどの地域にも「まちなみ」や「むらなみ」が確かに存在していたはず…。

（編集子　鵜野）

表紙の言葉

久し振りに三津へ立ち寄った。活気付いた人の気配や港らしい面白さを感じる事もなく静かで薄べったく見えた。

港に出たら渡し船から人が降りて来た。また乗った人を向こう岸まで運んで行った。

昔、自転車と共に乗船したが、船までの段が高く、ゆらゆらと細長く伸びていた。サーカスのような恐ろしい想いをした渡し船は姿を変えて健在。

柳原あや子

飛騨古川『ひとづくりまちづくり』の観光協会

岐阜県飛騨市古川町
古川町観光協会
会長　柴田　駿一

飛騨の古川町は昨年一月までは一万六千人の小さな町でしたが、今は二町二村が合併し、三万人の飛騨市になりました。

三年前、古川町はＮＨＫ朝の連続ドラマ「さくら」の舞台であり、当時は観光客で大変賑わう町でした。毎日が古川祭りのような人出があり、古い町並みは車の通行もままならない時もありました。

しかし、お蔭様で今はめっきり観光客も減り、町民はこれで古川らしい静けさが戻ってきてほっとでき、今おこしになっていらっしゃる観光客の方にもちゃんとしたおもてなしができると喜んでおります。

かつて古川町はさしたる特徴もない農業と商業の町でしたが、七十九年に青年会議所を中心とする若手有志たちが古川のまちづくりの基本研究を始め、足かけ三年でまちづくりのＶＴＲ「ふるさとに愛と誇りを」を製作したのを契機に、彼等が各種団体のリーダーとなって、観光協会の理事たちに働きかけたのがまちづくりの始まりであります。

八十六年には、観光協会において古川町の町並みにマッチした新建造物に贈る『景観デザイン賞』を創設。以後、住民の間で町並みを守ろうという意識がすこしずつ高まってくるのであります。

八十七年には町長の諮問を受けた観光協会が道路、文化、農林業、スポーツ、市街地開発の五つの部会からなる『古川未来策定委員会』を組織して、まちづくりと観光を提言した「ＦＰＣ構想」をまとめあげ、行政もこの提言を積極的にとりいれ、古川町は大きく変貌していくわけです。

これらの事業を通じて、誰かに頼るのではなく、自主自立の精神を持つ目覚めた住民をつくることがハード以前の問題である事を確信し、観光協会は『ひとづくりまちづくり』をテーマに以後活動していきます。

この時期、日本ナショナルトラストの町並み調査が始まり、ここで様々な評価をいただき、古川町では地元の人たちや専門家のワークの結集を機会に、大工や住民の町並みや建築様式に関する関心が一気に高まりました。九十二年には地元が中心となり『景観ガイドライン』を策定し、九十四年には『景観基本計画』を策定実施、九十六年には『古川町ふるさと景観条例』が制定施行されました。

しかし、重要なことは条例の制定ではなく、住民の皆さんが相場を崩さず、行政の指導だからでもなく積極的に古川の町並みにあった家を造っていこう、守っていこうという心意気であり、古川にはそれがありました。だからこそ、古川の美しさは一層磨きがかかってきたのだと思います。

経済的な豊かさの追求ではなく、先人たちが命がけで残してくれた歴史伝統文化を育み守り伝えていく作業こそ私共の使命であると観光協会は考えております。

ここから、このまちに対する『愛と誇り』が生まれてき、このエネルギーがさらに町並みの景観整備という自分の町の魅力づくりを積極的に進めていくという素晴らしい「こころの循環」がこの古川町には今も脈々と息づいております。

にぎわいと和みの参道へ

四国中央市
伊予三島本町商店街
理事長　篠永　二郎

「まちづくりには最低二人のバカが要る。一人はもちろん商店街に。あと一人は行政に。」

…商店街の先輩にそう教えられた時、「はあーそうですか。」内心、少なくとも俺はバカになるほどバカじゃないし役所にもそんな人いないでしょ、と聞き流していたのが昨日のように思えます。いつの間にかバカの道を歩み始め、気がつけばもう六年。今、私達の住む本町商店街が半世紀ぶりの大改修で生まれ変わろうとしています。

本町商店街の歴史は古く、元禄の頃、通りの西口にあった今治藩の代官所と東口にあった庄屋と三島神社をつなぐ通りとして発展したそうです。三島神社の歴史はさらに古く、奈良時代の七百二十年にまでさかのぼります。

本町商店街に隣接する三島神社

商店街を練り歩く太鼓台

ただし、商店街の街並みは全く統一感のないもので、歴史・文化を感じさせるどころかほとんどが昭和四十年代に建てられた和洋折衷の店舗兼住宅。これといって特徴もなく、神社の参道というイメージも皆無でした。

事実、先の三島神社の歴史は図書館で調べたのですが、後で知ったところ、その歴史や資産はすべて神社の入り口の門に大きく書かれており何十年住んでいても全くそれに気づかないくらい意識していないレベルでした。

神社は意識しなくても昔からそこにあるという、ある意味、身近な存在ですが、祭りとなると話は別です。三島の各地区には自慢の太鼓台があり、秋祭りには百人以上の担手に担がれた豪華な太鼓台が本町商店街を通って三島神社を目指します。この日ばかりは皆、ここで商売していることに誇りを感じます。現在のまちづくりをスタートさせて以来、その心意気は「太鼓の通る道を廃れさせてはいけな

い。」です。

くもの巣が張って洞穴のように暗いアーケードをまず撤去し、参道にふさわしい通りとなるために、道路と街路灯、そしてゲートモニュメントの整備をする。これに合わせて、商店街の各店舗は和の統一されたイメージにファサードを改修する。

これが現在進んでいるハード事業です。

ここにたどり着くまでには、笑い話、恥ずかしい話の連続でした。私は何事も形から入ろうとするタイプなのですが、今回も同様で、最初の勉強会でいきなり「道路は石畳が良いが、色で悩んでいる。」などと発言。言う方が言う方なら、聞く方も同様で「そりゃええのう。色は次回までの宿題にしよや。」と答える始末。どこまで本気かわかりません。コンセンサスなどという言葉は数年後知りました。街路灯はこのタイプで、入口にはでっかい鳥居を建てよう。八人の理事でこうした夢のような話に始終し、翌年の総会では組合員を前に手書きのスケッチを見せながら自信満々に事業説明。その反応は、「すごいねえ。大変じゃねえ。頑張ってねえ。」というありがたいお言葉。

今思えば、こうした人々の集まりだったから出来たのです。そう、うちの商店街の人々はとにかく皆良い人ばかり。昔からずっとこうで、コミュニケーションはバッチリ。見た目は古臭い商店街だけど、住んでいる人々はとても暖かく、仲良く助け合いながら生きています。まちづくりを進めていく上で一番大切なものは最初からそろっていたわけです。感謝。

一方行政はというと、バカどころか担当部署の人々はまるで侍のような人々の集団で、とにかく熱い。自分たちは何をすれば良いのかとの問いにはいつも「専門的なことよりもみんなのやる気が一番。いっしょに頑張ってまちづくりを実現していきましょう。」という返事。まさに信頼に基づく共同の事業で、それはそれは気持ちの良いものです。

アーケードを撤去する商店街

まもなく道路工事がスタートしますが、実は本町商店街は県道です。計画当初、「この道を石畳にしようと思います」などとぶち上げ（県のものなのに…）、「その資金は、商店街の中の銀行で借ります。」と自信満々に語っていた（見積りも自分たちで計算したため、まったくはずれていました。）のかと思うと恥ずかしさでいっぱいです。確かに純粋にバカでした。

そのバカさでもって進めてきた整備事業は、この夏完成予定です。

各店の改装もスタートしました。どんなセミナーに出ても行動に移せなかった店の変身も、アーケードという屋根がなくなった途端一斉に始まりました。外観だけでなく、商品内容や販売方法まで変えようという店舗も出てきました。形から入るというやり方もある意味間違っていなかったと思います。

ただし！事業完成後は、これ以前からこつこつ取り組み続けてきたソフト事業がハード事業以上に大切になってくるということは皆わかっているようです。少し成長したかな？

商売繁盛は私たちの使命です。個々の店が頑張り、通りに賑わいをもたらせていかなければなりません。古から皆を見守ってきたお宮、そして伝統ある祭りを守っている人々、それを楽しみにしている人々のためにも私たちはこの地で頑張っていかなければならないと思います。

今回の事業のコンセプトは「にぎわいと和みの西参道」です。

わがまち、三津浜の財産を生かして賑わいを創造していく

松山市
平成船手組
副会長　秋山　義勲

「平成船手組」の船出！

中世の時代には伊予水軍として活躍した河野氏の軍船が出入りし、藩政時代には松山藩主が三津浜を水軍の拠点に定め、船奉行所が設置されました。我々「平成船手組」の名称に使用している松山藩の御船手組（おふなてぐみ）が組織化されたのもこの頃です。松山藩主が参勤交代する際には三津浜から江戸へ向かうなど、三津浜は海上交通の要衝として発展してきました。明治には正岡子規や秋山好古・真之兄弟ら多くの先人達を送り出し、文豪夏目漱石は三津浜に降り立ち、三津駅から陸蒸気にのって松山城下へ向かっています。

戦災を免れ、歴史を偲ぶまち並みや建物、史跡が数々残されている三津浜！平成十二年には松山市が描く「坂の上の雲のまちづくり／フィールドミュージアム構想」のサブセンターゾーンとなり、新しいまちづくりの動向が注目されています。

そのような中で、「平成船手組」は、三津浜を中心に松山西部地区の開発と発展に向けた活動をサポートするボランティア集団として活動しています。旗揚げしたのは平成六年十一月ですが、活動はその前年、平成五年七月に発足した「ふるさと三津浜を考える会／青年部」の活動が基盤となっています。

青年部の発足は、まちの基幹となっていた商業が衰退し、三津浜に活気が消えたことを受け、平成に入って活性化に向けた動きが進行した事が契機となりました。まず、平成三年に松山市西部地域の活性化と再開発を検討する「松山西部地域開発協議会」（以下、協議会）が活動を開始しました。平成五年六月には三津浜在住の町内会世話役らが「ふるさと三津浜を考える会」を結成し、その翌月、「地元で生活している次代を担う若者が参画し、主体的にまちづくりを進めていく必要がある」との考えから、「ふるさと三津浜を考える会／青年部」を立ち上げることになったのです。地元商店街の若手リーダーとして活躍していた藤岡敏明氏を会長に、二十歳から五十歳までの三津浜在住の有志が集結し、「協議会」が主催する活性化の事業の実行部隊として活動が始まりました。

平成六年には、「協議会」がふるさと三津浜の良さを再発見してもらおうと企画した「みつはま　暮らしと町並み博物帖」の作成をサポートすることとなり、青年部は、調査や資料集めなどに奔走しました。また三津浜の夏を彩る風物詩「三津浜花火大会」の企画運営にも積極的に参画し、運営に全面協力しています。

そして青年部には、今は三津浜に在住していないものの、ふるさと三津浜の再

生を応援したいという仲間が集まりはじめ、それならば志を同じくする人たちに幅広く協力を求めていこうと、平成六年十一月六日、「平成船手組」として新たな船出をすることになったのです。

初代会長は、藤岡敏明氏。設立趣意書には「この歴史あるまち三津浜をこれからどうするのかが、ここに住む一人一人に向けられている。ただ一つ明確なのは若者がこのまちを受け継ぐということであり、その責任を負うということだ。まちの歴史、先人の努力に敬意を払いつつ、今私たち若者に何ができるのか…。皆で考え行動したい。この港と暮らしの向上を願う心を、心とする地域有志の賛同を得て、ここに「平成船手組」を設立し、ふるさとづくりの支援活動をしていく」と決意が記されています。

誇りに思うふるさと、三津浜へ

「平成船手組」の活動はすべてボランティアで、何事も自主性を大切にし、活動の強制はしないというのがルールです。仕事を終えてから毎週定期的に会合を開き、活動方針や事業計画、運営手順、役割分担などを議論します。正副会長と事務局はいるものの、メンバー間に上下関係はなく、親睦を図りながら自由闊達に意見交換しています。

主な活動テーマは、三津浜花火大会の企画運営、秋祭りのサポート、地域学習会の企画運営、歴史のこみち事業の参加、三津浜地区の歴史的建造物の保存と活用への参画、三津浜瓦版の発行など。

結成間もない平成六年の十一月には「協議会」主催の、三津浜のまち全体を博物館と捉えて、歴史ある建造物、町並み、史跡などを自由に散策してもらう「みつはま生活博物館を歩こう」のイベントに運営部隊として参画しました。これは、ユニークな取り組みとして多方面から注目を集めることとなり、今では年二回開催の名物行事として定着し、「平成船手組」の重要な活動テーマになっています。

また平成八年三月、「協議会」が主催した「港山の清掃奉仕」では、「平成船手組」の働きかけで、地元三津浜中学校に通う学生で組織する「平成船手組ジュニア」が旗揚げしました。「平成船手組」と一緒に活動に参画してもらい、将来の三津浜の街づくりを担う若者を育成したいというのがねらいです。ジュニアは花火大会や生活博物館のイベントでは欠かせない貴重な存在となっています。そのほか、三津浜港で打ち上げられた二〇〇〇年のカウントダウン花火にも関わり、行政との調整や運営企画をサポートし、大成功を納めています。

これからの活動の主なテーマは、「生活博物館」の活性化、「坂の上の雲まちづくり構想」実現に向けた主体的な企画と参画、歴史的建築物の保存と活用の企画と参画、三津の朝市の復活、フリーペーパーの発行、三津浜花火大会の活性化、二〇一〇年メモリアル花火大会の実現への取り組みなど。

三津浜には、歴史ある建造物やまちなみ、史跡などの財産がいたる所に点在しています。「平成船手組」は二代目の瀬村要二郎会長のもとで団結し、これらの財産を生かして、滞留し回遊し交流するしかけを工夫し、賑わいを創造していきたいと考えています。そして三津浜に生まれた人々が、ふるさと三津浜を誇りに思う！そんなまちづくりに取り組んでいきます。

平成船手組ジュニア

三津の渡しに集う平成船手組

まちなみ歩きで再発見

八幡浜市
保内町観光ボランティアガイドの会
大上　昭

はじめに

保内町は、佐田岬半島の付け根に位置し、県都松山からは、一時間あまり。温暖な気候で、基幹産業は、みかんなどの柑橘類、三月二十八日に隣りの八幡浜市と合併して、これから新しい町づくりに励もうとしている人口一万人あまりの町です。

時代背景と町並み

歴史的には、江戸時代から海運業などを通じて大阪や九州との交流が早くから行われており、ハゼなどの木蝋産業、明治期の銅鉱山開発、紡績工場の創業、蚕種業などで栄え、全国で二十九番目の国立銀行の設立、又、四国で最初に電灯が灯った町でもあります。

社会科の教科書に掲載されている近代化産業の変遷が実体験できるユニークな町「保内」。又、国の有形文化財の指定物件も三点ある。

明治から創業し大正期に建造された、和洋折衷でトラスト構造の大規模的な木造三階建て、現在も操業されている「愛媛蚕種」、青石の石積みが残る「二宮庄屋跡」、昭和期に建造され洗い出し技法を用いられた外観におおわれ、玄関上にはバルコニー、又、太平洋戦争時の米軍戦闘機の銃弾跡が生々しく残っている柱など、歴史の証人である「内之浦公会堂」。

平成十五年に東洋紡績赤レンガ倉庫横の道路を改修した約三百五十mの木製遊歩道「もっきんろーど」をとおり、右岸の青石護岸を眺めながら散歩をすれば、気分もリフレッシュできることでしょう。地元の方々にも多くの方々に利用されています。

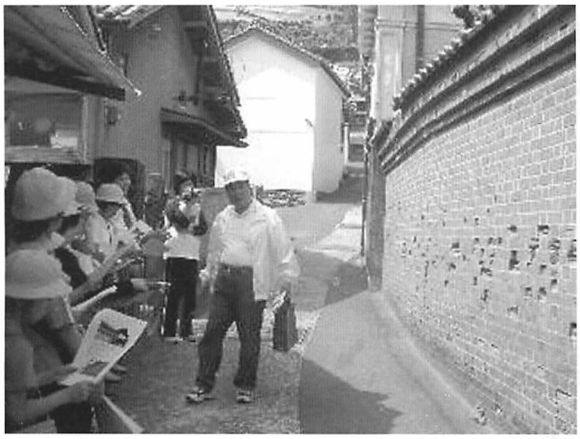
町並みボランティアガイドのきっかけ

「ガイドの養成」を目的に平成十四年九月に行政や商工会の協力を得て、三十五名の受講生により半年間の研修が行われました。地元に住んでいながら知らない事ばかりで、実際に歩いてみると再発見が至るところにありました。この貴重な体験が平成十五年四月に「保内町ボランティアガイド」として発足し、現在は二十二名の会員で運営しています。年齢も職業も多様ですが、自分達自身が学習しながら、楽しみながらを前提にスタートしました。

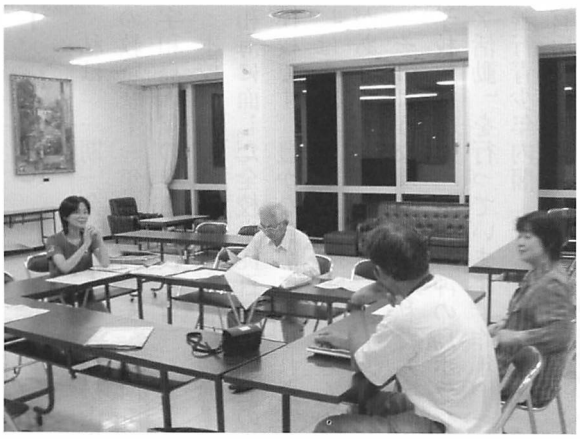
一年目は連続して毎週のように申込者があり、計二十一回、六百二十七名の案内をしました。参加者の内訳は、地元の小中学生の課外授業、職員研修、歩くこ

とを目的に、カルチャー講座で保内の事を学習されて興味を持ち訪れる方など多種多様で、地元から又、遠くは、松山、高松、大阪、東京などから来られ、案内しながらも逆に勉強することも多々ありました。炎天下の中、又、雪の舞う真冬でのガイドなどは、身体的にも大変でした。予想外の申込み者で、会員の割り振りにも苦労し、テレビや新聞、雑誌等のマスコミ、メディアからの取材も頻繁にあり、充電する間もなく放電ばかりの一年でした。

二年目は、会員の質をあげるために、マップづくりに取り組むことになりました。講師を招き、今まであったものとは違った、どこにもないマップ作りに意気込み取り組んだわけですが、実際行ってみると、予想外に難行し実地研修を重ねながらやっと、第一弾のマップが十月に完成しました。七月には、五ヶ所の歴史的建造物をライトアップし、夕方からガイドを実施。約五十名の参加者がありました。今年度については、一月末までに十二回、百六十七名と昨年に比べ、減少回数ではありますが、数に関係なく楽しくガイドに取り組んでいます。



郷土の歴史を学ぶ地元小学生



定例役員会

今後の課題

今後の問題としては、合併に伴う環境の変化によってどう変わっていくか、これは、他の市町村においても同様なことが生じていると思われます。現在抱える駐車場やトイレ、食事や土産物の問題などを行政や商工会、地元の業者の方々の協力を得ながら、又、元・八幡浜市のガイドの会の方々との交流をし、新たな出会いに心をこめて今後も活動していきたいと思います。

是非、魅力あふれる町「保内」に一度足を運んでくださいませ。

歩こう会（150名）をガイドして

フォーラムUWAUMI
～宇和海地域の魅力を探る～

宇和島市
宇和島市立宇和海中学校
教諭　橋本　眞年

1．はじめに

私は「一期一会」が大好きな松山出身の教職歴十一年の教師です（愛南町一年、宇和島十年のうち本校四年）。

本校は黒潮の香る日本有数の漁場、宇和海に面した全校生徒百三十一名の小規模校です。豊かな自然に恵まれた宇和海には真珠、魚、段畑などたくさんの宝物があります。

そのような環境の中、私たち宇和海中学校生徒会は、毎年「沖の島ボランティア活動」を行っています。昨年十一月に善行青少年内閣官房長官表彰されました。生徒たちはこの活動を通じて、郷土愛や奉仕の精神、環境保護活動への参加意欲の高揚、ゴミの問題等、様々なことを考え、学んでいます。

27年の歴史を誇る沖の島ボランティア活動

2．フォーラムUWAUMIのきっかけ

教師は自分なりの個性を発揮し「魅力のある学校づくりに貢献すること」が大切だと思います。私は初任者のときに愛南町立赤水小学校で「ワールド・パーティー・ランド」という子供も大人も参加して楽しむ国際交流の実践を始めました。毎年町の広報誌や新聞に掲載され、この企画で学校や地域に少しずつ変化が見られました。この国際交流事業は昨年で十周年を迎えました。私は今も事務局の世話人、司会として学校と地域とを融合したこの企画に携わっています。十年目研修の本庁研修時に「学社融合」の講義があり、このような学校の枠を超えた取組がこれからの学校では大切だと改めて感じました。

そこで、今年はより文化度の高い文化祭にしようという生徒の願いがあったことから、フォーラムを開催しました。

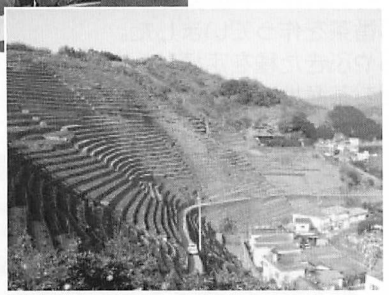
「フォーラムUWAUMI」という地域内外の四人のパネラーから宇和海地域の魅力についての話を聞き、共に考える企画にしました（愛媛新聞十一月十日掲載）。このフォーラムを通して日本農村百選に選ばれている段畑や水産業の現実と未来について生徒たちに意欲的に学んでほしいという願いがありました。また、「舞たうん（本紙）」にも執筆されている本校の卒業生からのメッセージを聞いて、今まで気付いていなかった宇和海の魅力について学んでほしい。卒業生と在校生との良いつながりも作っていきたいという思いがありました。

フォーラムUWAUMI

3. 実施の様子

フォーラムはたくさんの保護者や地域の方々に御参加いただいた中で、実施されました。コーディネーターを私が務めさせていただき、内容は次の通りです。

①段畑にはどのような歴史があるか？
　宇和海中学校教諭　宮本　春樹
②耕作者として段畑の魅力を語る
　段畑を守ろう会　松田行雄氏
③漁業者の視点で宇和海の魅力を語る
　前遊子漁協組合長　古谷和夫氏
④宇和海の魅力
　～今みなさんに伝えたいこと～
　早稲田大学三年生　藤田圭子氏
　代読：遊子水荷浦在住の在校生二人
⑤会場との意見交換


耕して天に至る段畑　撮影：藤田圭子 氏

4. フォーラム後

松山から今回の企画にぜひ参加したいという方々もいらっしゃいました。その後、えひめ地域政策研究センターで生徒の感想を分析していただき、九枚のレポートにまとめて送っていただきました。その分析によると、九十四％の生徒が今回のフォーラムで「宇和海地域の魅力」について考えることができたようです。

生徒の感想を紹介します。

○豊かな未来を築くためには過去を考え直すこと、今を見つめ直すことがとても重要だと思うので、フォーラムを開催することで宇和海地域の未来に貢献することができたと思います。

○藤田圭子さんが故郷の水ヶ浦の段畑をこんなにも一生懸命に考えてくれていたことに感激しました。古谷さん、松田さん、宮本先生も地球環境などを交えて段畑のことを今でも語り続けています。「こんな人たちを大切にしたい。自分もこんな風に故郷を思いやれるようになりたい。」と思いました。

5. おわりに

今、宇和海地域は最大のチャンス。

宇和海には双海町に負けない夕日、内子町の町並みに負けない村並みがあります。宇和島遊子（段畑）が文化庁モデル地区に指定された今、段畑を中心に結出・遊子・蒋渕・戸島・嘉島・日振島を含めた総合型の町づくりを展開していくことが宇和海みんなの未来に夢を広げることになると思います。

そのためには地域のみんなの心をひとつにして、十年後の宇和海ではなく、五十年後、百年後の宇和海を見据えた情熱とビジョンをもって企画していく必要があると思います。

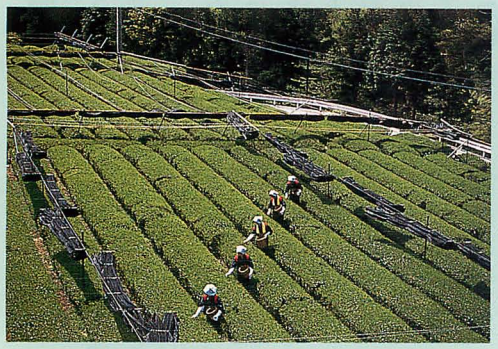
夢をはかないものから実現するものにしたい。そのためには宇和海に携わる一人ひとりが、プラス面もマイナス面も考えた上で、一歩一歩前へ前へと進んでいくことが大切だと思います。ハード面は半島部の全てが光ファイバーで整備されるほど地域社会が変化した今、大切なのは人と人とのネットワーク。家族の絆、地域との絆。宇和海の子供たちに豊かな自然の中で心豊かにたくましく生きる若者に育ってほしい。そして、藤田圭子さんのような故郷・地域を本当に愛する若者たちと今までの歴史を知り、生きる知恵をもった古老たちがつながった本当に幸せな地域になることを願ってます。私も微力ながら未来の架け橋になれるように精進していきたいと思います。

宇和島市立宇和海中学校
HP　http://uwaumi-j.esnet.ed.jp

まちなみ・むらなみ　～景観・暮らし・物語～

愛媛県内には、その地域独特ともいえる歴史、風土・風習といった文化、そして人の営みがあり、その姿は一様ではありません。そういったものを紐解くと、地域の生き様そのものが「まちなみ」や「むらなみ」となるのかなと思います。

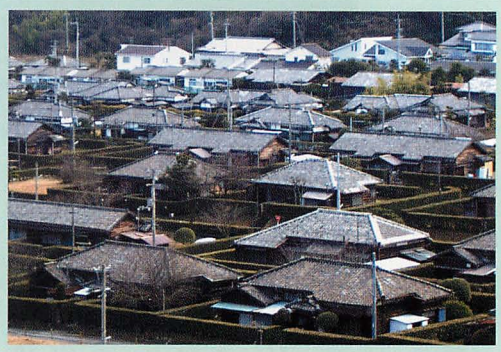
ここでは、最近おじゃました地域の「まちなみ」や「むらなみ」をご紹介します。



四国中央市　新宮町の茶畑

海抜650メートルの山の中腹までにはヤマチャが自生し、古くから日干し番茶を作っていました。

昭和29年からやぶきた種を定植し、今ではまちぐるみで無農薬茶に取り組む茶産地です。



新居浜市　星越地区

別子銅山とともに工業都市として発展した新居浜市。

昭和２年、別子鉱山鉄道下部線沿線の星越地区に会社幹部用の生け垣で囲まれた住宅を建設し、今でもそのまちなみを望むことができます。

西条市　千町（せんじょう）の棚田

西条市から高知県へ向かう国道194号沿いから千町に入ると山間斜面に石垣で拓かれた棚田が広がります。

石を割った石積み、急坂に細長く狭い水田を丹念に作り上げたその姿に、先人の苦労を垣間見ることができます。

東温市　井内の棚田

国道11号線から県道210号線に入ると井内の棚田が見えてきます。かなりの広範囲にわたり斜面という制約を受けながら、山間部独特の曲線を描く棚田をここ井内では堪能することができます。

砥部町　七折の梅園

「七折小梅」のブランドも定着し、県内有数の小梅の産地と知られる砥部町七折。地元農家が栽培する梅は一万本を越え、味と品質に定評のある梅園では、梅の花が山すそ一面を染めます。

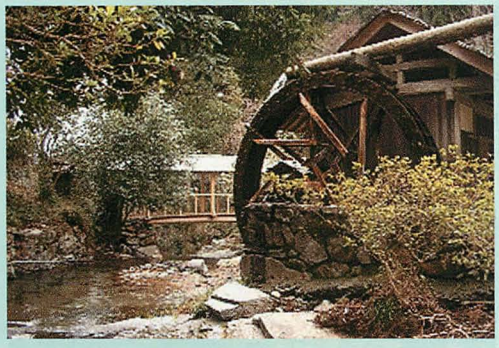
伊予市　灘町・湊町

灘町・湊町界隈には、「うなぎの寝床」とも言われる奥行きのある伝統的町家が宮内邸を中心に多く残っており、その歴史を表す象徴的な町家たちが郡中のまちなみを語ってくれます。

内子町　八日市・護国地区

江戸後期から明治にかけ、木蝋生産で栄えた内子町。その蝋商たちが建てた建物はまちの歴史を物語り、美しい白壁・土蔵造りがゆるやかな坂道沿いに建ち並んでいます。

昭和57年に重要伝統的建造物群保存地区に選定。



内子町　石畳地区

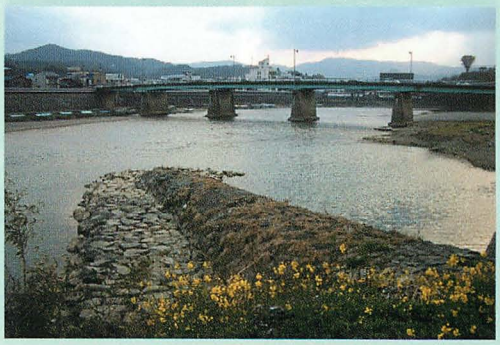
石畳のむらなみとして象徴的な水車は「石畳を思う会」によって復元されました。石畳地区全体には日本の原風景とも言えるのどかな景観が色濃く残り、その持つ意味を深く伝えている地区です。

内子町　泉谷の棚田

旧五十崎町にある泉谷の棚田は、急峻な谷あいにあり、100枚余りの棚田は「日本の棚田百選」にも選ばれています。また、数十メートルの石積みも見られ、往時の苦労が偲ばれます。

大洲市　肱南地区（おはなはん通り）

伊予の小京都、大洲。中世から城下町としての栄えた肱南地区の象徴的な町並として、おはなはん通り（写真）があります。この肱南地区の町並は、幾つもの時代の面影を残し、時の流れを醸し出しています。

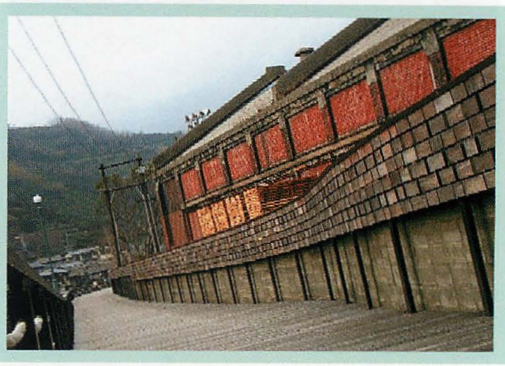


大洲市　肱川のナゲ

肱川の洪水により多くの被害に見舞われることを防ぐため、「ナゲ」と呼ばれる石積みがつくられました。水制により洪水を制御するために作られ、古地図には沢山ありますが、現在残っている貴重なものです。

大洲市　肱川の瀬張り漁（アユ漁）

豊かな自然の恵みを与えてくれる肱川。アユ漁のひとつで、竹を割って川に打ち込み、白いテープを川底に流して落ちアユをとめて投げ網で捕る肱川の風物詩です。

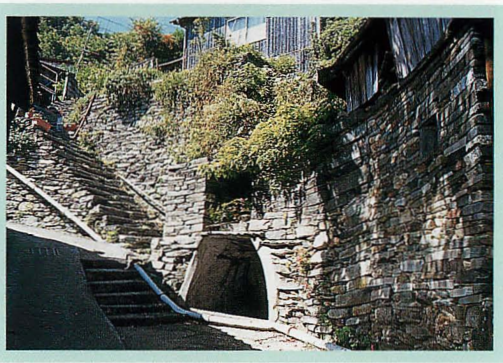


八幡浜市　保内町の近代化遺産

保内町にある明治のアンティークなまちなみ。からみレンガや赤レンガがまちを彩り、まちの象徴として残る多くの近代化遺産が海運業、鉱業、紡績のまちとして栄えた保内町を物語ります。

伊方町　蜜柑の段々畑と防風林

リアス式海岸の佐田岬半島。急傾斜に石垣を囲み、畑の周辺に杉やマキを防風のために植林した風景は、伊方町特有の風土とそこで暮らす人のいとなみや知恵と工夫を見ることができます。



伊方町　名取の石垣集落

旧三崎町の名取にひとつひとつと積み上げられたひな壇型の石垣集落があります。佐田岬半島の風土的個性そのものの農村風景であり、先人の偉大さを垣間見ることのできる集落景観でもあります。

伊方町　大佐田の船蔵群

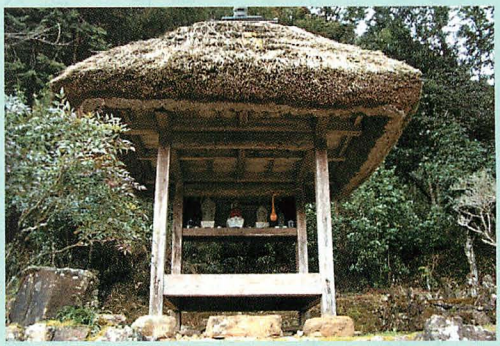
旧三崎町の大佐田では、台風の被害から漁船を守るため、船蔵群が海岸線に建てられています。船蔵は同一の様式で建造され、その景観は今も変わらない風土的特色とともに歩んだ当時の暮らしを彷彿させます。

西予市　卯之町中町

江戸中期から昭和初期に建てられた商家が軒を連ねる卯之町の町並は、白壁やうだつ、出格子といった建築様式が踏襲され、在郷町として、また宿場町として栄えた面影が宇和のゆかしい文化を薫らせます。

西予市　石城平野のわらぐろ

県内屈指の穀倉地帯として知られる石城平野に愛らしく林立するわらぐろ。春のレンゲや菜の花、たわわに実った稲穂が一面に広がる秋、そして冬には雪化粧でわらぐろを静かに飾り、四季折々の農村景観がここにはあります。



西予市　城川町の茶堂

茶堂は南予地方を中心に残っていますが、西予市城川町内に特に多くの茶堂（52ヶ所）があります。昔からお茶の接待や地域の信仰の場として親しまれ、地域の代表的な風景として、馴染み溶け込んでいます。

松野町　遊鶴羽の棚田

比較的大きな石材を利用した石積みが特徴的で、急斜面に連続して展開している遊鶴羽の棚田は「日本の棚田百選」に選ばれています。

宇和島市　遊子水ヶ浦の段々畑

「耕して天に至る」「宇和海のピラミッド」「灰色の鎧」などと形容され、急峻な斜面一面を切り開き、何段も石積みされた圧倒的とも言える存在感の段々畑は地域の歴史といとなみを色濃く残しています。

津島町　岩松地区

津島町岩松地区にある古い酒蔵の西村酒造場を中心に、まちの軒先には、職人の技術を競うかの様に持送（もちおくり）と呼ばれる建築技法が凝らされた家々が点在し、岩松の風情を彩っています。

愛南町　外泊の石垣集落

石垣の里として名を馳せる旧西海町外泊。石垣がひな壇状に広がり、その要塞のような景観は重厚、かつ芸術的です。冬の強い季節風と潮害を防ぐため、急勾配の坂道に築かれた石の壁が地域の風土を表しています。

キラリ☆光るまち

～栃木県今市市小代～

まちの木造駅舎を窓口に 都市と田舎の交流を

小代の会～木造駅舎とともに～

代表　柴田　智子

我が町、小代

栃木県今市市にある小代は世帯数四百戸、人口千二百人程の農村地と新興住宅地の混在する地域で、世界遺産「日光東照宮」へと続く日光杉並木街道の入り口に位置しています。ここから日光へは約二十km。その間、むかし宿場であったところを除いて巨大な杉の大木が立ち並んでいます。

東京からは約百kmありますが、東武日光線を使えば最寄りの「下小代駅」まで浅草から二時間、運賃も千円程でお越し頂ける交通の便に恵まれた地域です。

木造駅舎が解体される！

一昨年前（平成十五年）の暮れ、突然この「下小代駅」の木造駅舎が解体されるという事実が判明。しかも、解体は十日程先の話だという。通学で慣れ親しみ、帰郷の際にはいつも変わらない姿で迎えてくれた木造駅舎が無くなってしまう！私は仕事そっちのけでともに木造駅舎に慣れ親しんだ親友たちに連絡をとりました。

「生まれ育った地域の思い出の場所が無くなる」「見慣れたふるさとの景観が変わっていってしまう」

そんな危機感や喪失感を共有して二十代の若者を中心として「下小代駅を活かす会」（現在の「小代の会」）を結成。下小代駅の木造駅舎の存続を目的として活動を開始しました。駅舎は日光線開通時の七十五年前（昭和四年）に竣工し、この地域が今市市となる前の落合村であったころからの数少ない建物。またこの地域出身で名誉市民第一号である加藤武男氏にゆかり深い駅であることなど、駅舎の価値が分かってきました。

乗降客が少なく無人駅であったこともあり、はじめは行政や上の世代に相手にされず途方にくれる時期が半年ほど続きましたが、地道な署名活動や周知運動の結果、徐々に世代を超えて理解されるに至り、小代に活性化をもたらすものとして応援されるようになりました。

有り難いことに、鉄道会社からも地域住民の中で意見をまとめる期間を設けて頂き、宇都宮大学の協力や全国町並み保

初期の20代を中心としたメンバー

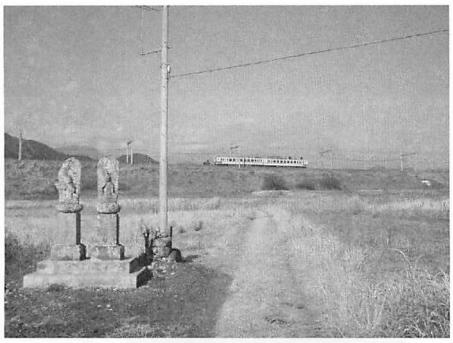
存連盟の支援を受けて、地域の活性化を見越した駅舎保存の可能性について地域住民を中心として検討しています。

故郷再発見

こうした活動を通して、我々はあらためて自分の故郷について深く考える機会を得ました。というのは、木造駅舎を残すためには乗降数をいくらかでも増やすことが求められ、それを実現するために駅の周辺環境について知り、現在無人駅となっている駅舎を有効活用した地域活性化を実現させる必要があるからです。

地域を活性化するためにはどうしたらよいか。

何もない、ただの農村地域だと思っていた自分の故郷。しかし、こうした眼差しでみると、交通の便がよい上に、都会とは違う魅力にあふれた地域であることに気付いてきました。日光連山の雄大な眺望、そこから集まる豊富な水。川の恩恵を受けて広がる田畑の景観。ゲンジとヘイケ両方の蛍が飛び、絶滅危惧種の珍しい固有種が花を咲かせる。ゆったりとした大木の桜やヤマツツジなどが駅前を彩る。当たり前のように見てきたそれらは貴重な存在で、それらを有する故郷は決して何もない田舎ではなく、景観資源にあふれる故郷であったのです。


かけがえのない故郷　小代の風景

都会には都会の魅力があり、合理的な生活を送ることが出来ます。しかし、田舎が都会の真似をする必要はないのではないでしょうか。田舎には都会にない魅力があります。第一、都会の人は今、田舎を求めるようになってきているのですから。

グリーンツーリズムの可能性

小代の会では駅舎の保存のため、下小代駅を窓口とした都会の人と農村の人が交流するグリーンツーリズム事業を展開したいと計画しています。様々な農村経験が可能であり、交通の便に恵まれた小代はグリーンツーリズムに最適の地域です。

小代の今ある魅力を多くの人に触れて頂くことで、現在の小代の魅力を下げることなく地域を活性化していくことができたらと考えています。その中で、地域の窓口になり顔である木造駅舎を保存していきたい。

水をテーマにしたウォーキングの様子

現在、グリーンツーリズムの準備イベントとして、日光線開通を記念して植樹された駅前にある大桜の花に合わせ、四月十七日（日）に小代の魅力を知って頂ける企画を交えた花見会を準備中です。

キラリ光れ！小代

小代はまだキラリとは光っていないというのが現状です。しかし、鈍い光はいくつもあって磨けばキラリと光る原石であるはず。

住民が地域に目を向け、地域に誇りを持ち、外部にアピールしていけば小代は近い将来キラリ光るまちになると信じています。

詳細はHPをご覧下さい。

www.plusco.jp/shimogoshiro.html

論談 ―まちづくり―

「棚田百選」をどう活かすか？

－中山間地域活性化の具体策－

島根県立大学総合政策学部助教授

井上　厚史

島根県那賀郡三隅町（人口七千六百五十一人、二〇〇五年一月末現在）室谷地区は、一九九九年農水省の「日本の棚田百選」に認定された棚田が広がる島根県西部に位置する小さな農村である。大麻山の麓に、上室谷・下室谷・諸谷の三つの集落が広がり、戸数六十八、人口百八十六（二〇〇五年一月末現在）、耕地面積約二十八ヘクタール、かつて最盛期には四千五百枚を数えていた全国有数の棚田地区であった。

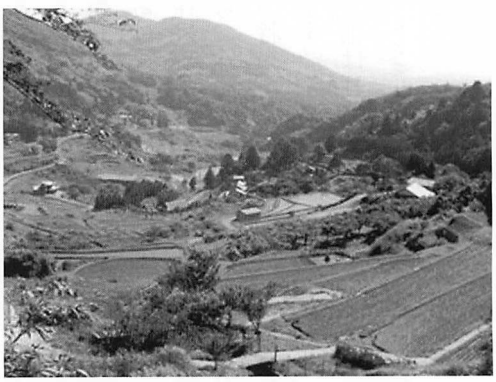
この地区は、江戸時代に砂鉄の一大産地として、また北前船の寄港地として有名であり、貴重な歴史的遺産を保有している。しかし、これまで正式な学術調査が行われたことがなく、地域の歴史は風化しかかっている。

「棚田百選」に認定されたことを受けて、三隅町は一九九九年から棚田緊急対策事業として農道の整備を実施し、二〇〇二年からは「棚田まつり」を開催している。しかし、こうした努力にもかかわらず、棚田は減少し続けており、現在一千枚を切ったとまでいわれている。とくに近年の冷夏、日照り、度重なる台風被害は、逆に耕作放棄地の拡大に一層の拍車をかけている。棚田の加速度的な減少と歴史の風化。それが現在の室谷地区の棚田を取り巻く現状である。

二〇〇〇年四月に島根県立大学が開学して以来、私はこの地区に関心を抱き、棚田の変遷や地区の歴史を調査してきた。そして二〇〇二年に、大学の付属機関である「北東アジア地域研究センター」の研究助成プロジェクトとして、「内発的発展論と〈補完ネットワーキング〉による中山間地域活性化に関する日韓比較研究」に取り組み、現在その報告書を作成している段階である。

この室谷地区で実践してきたわれわれの取り組みを、ここで簡単にご紹介したい。まず、私が室谷地区の問題として考えたのは、次の四点であった。

1．高齢化のため年々農業従事者が減っているにもかかわらず、地元で後継者が育っていない。



「日本の棚田百選」に選定されている室谷の棚田風景

2．ツルウメモドキの栽培や棚田のオーナー制の実施など、いくつかの活性化事業が試みられたが、いずれも失敗に終わっている。

3．周辺に同じ様な棚田地区がいくつもある（地元では、柿木村の棚田のほうが有名）ため、市民の注目が集まりにくい。

4．貴重な歴史的遺産が整備されていないために、「むらおこし」に活用できる資産がない。

これら四つのマイナス要因を是正するためには、(A)労働力の確保と(B)地域のアイデンティティの再発見が必要である。(A)労働力の確保については、地域には若者がほとんどいないことから、大学生を活用することにした。当初はボランティア活動として取り組んでいたが、田植えや稲刈りを楽しみながら行う学生が多いことから、二〇〇四年度からは私と同僚（林秀司）のゼミ生合計三〇人とともに、授業の一環として取り組むことにした。いざ始めて見ると、炎天下の草刈り作業に不満の声も出たが、大学から車で三〇分という近距離にあることや、西瓜、トウモロコシ、サツマイモ、米などの収穫物をもらえることも手伝って、一年間の活動を無事終え、学生が自主的にホームページ（http://www.16.ocn.ne.jp/~tanadian/）を運営するまでに盛り上がっている。

農作業をする学生（1）

また、(B)地域のアイデンティティの再発見については、戦前に栽培されていた「亀治」という米に注目し、その復活栽培に取り組むことにした。「亀治」は、島根県安木市荒島の廣田亀次（亀治）が明治八年に選定した品種であり、山間地の栽培に適し、病虫害に強く、酒米にもなるという特性を持っている。戦前島根県の奨励品種に認定され広く栽培されていたが、単位面積当たりの収量が少ないことから戦後コシヒカリなどに駆逐され、いまではほとんど栽培する者がいない状態であった。農薬を使わない、化学肥料を使わない、収量を気にしない、収穫した米は酒造りに使用する、という原則の下に試行錯誤を重ね、昨年地元の酒造メーカーで純米吟醸酒の試験醸造（「むろっこ」）にこぎ着けた。杜氏による評価も「まろやかで後切れがよい」と上々で、今年の出来を今か今かと一同待ち望んでいる状態である。

一年間の活動を終えた学生の中には、将来の職業として農業を真剣に考える者もおり、大学生が棚田の活性化に取り組む意義と有効性を確認できたように思っている。農業は地元の協力なくしては不可能であり、多くのノウハウを必要とする。今後も地元と協力しながら、大学生が将来の職業として選択できるような棚田の有効活用を模索していきたい。

農作業をする学生（2）

若者とまちづくり　第4回

大学生とまちづくり

えひめ地域づくり研究会議
代表運営委員　若松　進一

1．大学でまちづくりを教える

私はそれまで三十三年間勤めていた双海町役場の地域振興課長を最後に退職し、二〇〇三年四月から双海町教育長に就任した。思えば公民館を皮切りに社会教育課、産業課、企画調整室、地域振興課を渡り歩き、常に住民運動の先頭に立ってまちづくりを推進してきたため、遺り残した仕事も多く多少後ろ髪を引かれる気持ちもあったが、教育という新しい分野への想いもって、悩んだ末思い切って転職した。同時にかねてより誘いの合った大学教育を非常勤講師として手伝うことになった。それは将来を担う大学生にまちづくりについて、現場サイドの声を伝えたかったし、学生時代からまちづくり活動に参加してもらいたいという願望を持っていたからである。

大学では法文学部総合政策学科夜間主の学生に仕事が終ってから出掛け、毎週水曜日夜六時から「地域振興とまちづくり」について年間六十時間もの講義をするのだ。フィールドワークを交えての講義といっても授業の組立てや資料作りなど準備作業も何かと多く、昨年四月から無我夢中、自己流のチャレンジが始まった。

それぞれの講師のガイダンスレクチャーを聞かせて希望する学生を集める方式で私に振り分けられた学生は二十一人だったが、彼ら学生は大学の外で漏れ聞く不真面目人間とは大違いで、眠ったり私語を交わすような者もなくやる気に満ちた学生ばかりであった。

「理論」と「論理」という言葉があるが、大学はどちらかというと「理論」先行で、書物を基に教えて行くのが普通である。私の場合は実践の中から生まれた言葉である「論理」しか持ち合わせていないため、時にはボディランゲージともなるが、学生にとってはこの教え方が新鮮に写るらしく、質問あり笑いありの何かと元気な教室である。教える側と教えられる側の関係は太鼓の響き合いに似ている。こちらの音が小さいと相手の音も小さい。逆に大きな音で打ち鳴らすと大きな音がこだまとなって返って来るのだ。魅力のない教室は勿論学生の側にも責任の一端はあるが、教える側の「こうあるべきだ」と、やったこともないできないことを口先で論し、「あるべきだ論」を振りかざす教え方で学生の心を掴むことは難しい。

私が学生のために選んだ年間テーマは「訪ねたいまちの条件」「住んでみたいまちの条件」で、七回の講義で予備知識を得ながらグループワークで議論し、設定した訪ねたいまち四つのテーマそれぞれに十項目、計四十項目、住みたいまちも同じように四テーマ十項目、計四十項目をセレクトする作業を行った。これらの項目はフィールドワークで出掛けたまちを調査する大切な共通評価の基準となるばかりでなく、フィールドワーク後に作り上げる訪ねたいまちと住みたいまちのモデルケースをつくる糸口となる重要な作業である。

愛媛大学での講義の様子

2．大学生の持つまちづくりイメージ

ところで大学生は「地域振興とまちづくり」について、どんなイメージを持っているのだろう。講義前のまちづくり論とはまったく無縁な時期に、最初の宿題として提出したアンケート調査結果の一部を羅列的に紹介したい。

Q1．「地域振興とまちづくり」と聞いてイメージするベスト3

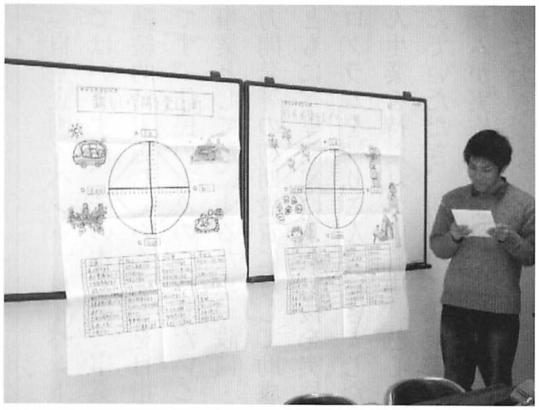
商店街の活性化・ゴミの落ちていない綺麗なまち・娯楽施設の建設・地元住民の参加・地域の特色を生かす・あるものを活かす・地域イベント・市町村合併・インターネットによる地域PR・特産品の生産販売・箱もの行政・観光開発・過疎化・生涯教育・ふるさと創生資金・住民と行政の協働のまちづくり・イメージアップ・交通の利便性を整える工事・治安の維持・温泉・自然・景観・開発か自然保護か・安全のまちづくり・小さな政府・地域振興券・住民の声・村おこし・観光地・都市再開発・町内会や子供会・その他（まちなみ博・坂の上の雲のまちづくり・昇る夕日でまちづくり）

このアンケートの結果を見ると若者のまちづくりに対するイメージは、ハードからソフトに至るまで幅広く、断片的ではあるが意識的にはまちづくりの芽生えが感じられる。要はこの帰帳の外的意識をいかに、まちづくりで最も大切な参加・参画・協働に誘導するかである。

フィールドワークの目的地は個性あるまちづくりを長年にわたって進めそれなりの成果を得て、長年にわたって内外に情報発信している東・中・南予の中規模な町をそれぞれ一箇所ずつ選び、特別地区として私の町も加えて四箇所とした。学生の出身地は主に中四国や九州が中心であるが、一部を除いて交通手段を持たない学生にとって県内の市町村を訪ねる機会はそんなに多くはない。ましてや調査という目的を持って訪ねることなど殆どないから、班毎に用意した車に分乗して訪ねる姿はまるで小旅行気分であった。しかし研修が深まるにつれて、それぞれの町でまちづくりに深く関わってきたまちづくり人の裏も表も見せて語る苦労話に一種のカルチャーショックを受け、渕から深みへと入って行く姿が感じられるようになった。

町をそれぞれの項目で採点すると意外な結果が出始めた。それまで訪ねることだけに集中していた目が住むことの意味へと移り始めたのである。まさにフィールドワークの成果といえよう。

（次号につづく）



フィールドワークの調査結果発表風景

「まちづくり」としての町並博

愛媛県経済労働部町並博推進課
イベント推進室　石丸　隆雄

「えひめ町並博二〇〇四」。これは、「十町十色。南予の町の物語。」をキャッチフレーズに、懐かしい古い町並みや豊かな自然を有する南予地域を舞台として開催された博覧会です。平成十六年四月二十九日から十月三十一日までの百九十七日間、各地で多彩な催しが繰り広げられ、百七十万人を超える多くの方々にご来場いただきました。

私はこの「町並博」に平成十五年四月から関わり、イベントの準備・運営に当たりました。それは、華やかな「博覧会」という言葉とは裏腹に地道な活動でしたが、事務処理から肉体労働まで様々なことを経験することができ、自分自身にとっても非常に有意義なイベントでした。

町並博は、「パビリオンのない博覧会」という呼び名が示すとおり、いわゆる「箱物」は作らず、既存の資源を掘り起こし、さらに魅力を加えることによりイベントを作り上げる手法をとりました。その中で最も基本であり、かつ重要であったと私が感じていることは、人と出会い、語り、協力していただく、あるいは参加していただくということです。これは町並博を一過性のイベントに終わらせないためには不可欠なものでした。

町並博では、「コアイベント」と呼ばれる集客力の高いイベントを大洲・内子・宇和の三地区で実施しました。これは三地区に残る「町並」を中核として、南予を周遊する旅を提案することを意図したものであり、県実行委員会が主体となって実施しました。このコアイベントについても、地域住民の方々の協力なしでは成り立たないものでしたが、町並博のイベントの中には、住民が自ら企画し、準備・運営する「自主企画イベント」というものがありました。

「自主企画イベント」はイベントと呼んではいますが、その本質は、事業として継続的に実施していくことを目指すものです。住民の方々の「やりたいこと」を事業として形にするため、設備・器具、能力開発等の初期投資に対して助成するとともに、専門家による支援を実施し、プログラムを練りこんでいきました。皆さん生業を持たれている中、熱心に取り組んでいただき、期間中に八十二のプログラムが実施されました。一つひとつの規模は大きくないものの、「町づくり型博覧会」を標榜した町並博としては、この「自主企画イベント」が主役であったといっても過言ではありません。

このような活動が評価され、「南予地域」は、国土交通省の「観光交流空間づくりモデル事業」のモデル地域に選定されました。町並博は終了しましたが、今後は、地域づくりの活動と観光交流の事業をうまく融合し、南予の魅力を恒常的に情報発信していく活動が続いていきます。町並博のイベントを担った人々、まちづくりの熱意を持った人々が中心となり、「南予」がますます魅力溢れる地域になっていくと信じています。

その“まち”が好きだから

ちょい×こみネットワーク
白石　昌弘

「choi × comi　ネットワーク」（以下ちょいこみ）は、松山の商店街を若い力で元気にしたいという想いを持って活動している団体です。実は僕　達の団体は、商工会や大学のゼミといった後ろ盾は何もありません。僕は、柳井町商店街という松山の南銀天街を抜けたところにある小さな商店街の入口に面したマンションで一人暮らしをしています。そもそも、この団体が立ち上がったのは、「自分の家の近くにある商店街の人達と仲良くなりたい」そんな些細な事がきっかけでした。それが、いつしか同じような想いを持った学生が一人また一人と集まり、二〇〇四年の初夏にちょいこみという団体が成立するに至りました。

そんな「まちづくり」の「ま」の字も知らないような学生ばかりが集まって結成した団体ですので、まず、まちづ　くりの事を勉強し、自分達の考え方に賛同してくれる仲間を集める事を目的として「まちづくり講座」を開く事にしました。

講座は、実際に商店街に出てのグループ活動形式で、その中でまちづくりとは〝そのまちが持っている資源を大切にする事〟を学びました。

次に僕達は、商店街を　対象にしたヒアリング調査を実施しました。これは、単なる調査ではなく、商店街に携わっている方々一人ひとりにインタビューをする事によって、数値面　だけではなくそれぞれがそれぞれの商店街の現状を知ってもらう事を目的としていました。

インタビューをさせて頂いた店　主の方々とは、時々買い物に行っては世間話をしたり、ちょっとしたオマケをしてもらったりと、今でも大変お世話になっています。

これは、普通に大学生活を送っていては味わえない体験だと感じましたし、ヒアリング調査をする事によって、何よりも自分達が商店街の事を以前よりももっと好きになってしまいました。

そうやって活動をしていったちょいこみですが、順風満帆であるとは言えませんでした。活動の期間が台風の時期と重なり、イベント自体が連続して順延してしまった事を初めとし、自分達の行なっている活動と周囲の反応のギャップにもぶつかりました。『そもそも、まちづくりとは元来その土地に住んでいる人達が長い時間をかけて行なっていくものであり、たかが学生のちょっとした力で何を変えていけるのだろうか？』という疑問は、今でも消えないまま活動を続けています。

僕は福岡出身で、今年は就職活動という人生の岐路に立っています。県外から来ている学生の殆どが、松山に滞在するのは、ほんの数年という短さです。ただ、初めて一人暮らしを始めた僕達を暖かく迎えてくれ、共に生活していった松山という土地は、もしかすると本来の地元よりも愛着があるのかもしれません。〝松山というまちが好きである〟その想いを大切にし、学生が持っている「行動力」と「ネットワーク」を武器にもう一度商店街や松山の魅力を再発見し、周囲の方々に伝えていけたらと思っています。

媛（ひめ）のかわら版

おイネさんドイツへ行く

（VOL. 2）

みかん一座
座長　戒田　節子

シーボルトの故郷、ドイツ・ビュルツブルク市誕生千三百年記念ミュージカル「シーボルトの娘・イネ」は、応援委員会発足と共に資金集めが本格的にスタートしました。二〇〇四年三月頃から、委員会の吉田委員長はじめ、数人のリーダーが中心となり、週一回の会議を行いながら進めていきました。

一方、舞台作りも具体的になり始めた三月二十一日、舞台監督の日之西さんが、以前からの病気が悪化し亡くなりました。みかん一座の裏を支え続けてくれた要の人でした。悲しみの中で、舞台監督を引き継いでくれたのは、日之西さんの片腕として協力してくれていた土居町の児童劇団団長、林さんでした。日之西さんが残してくれた設計図を元に舞台装置の具体化を進めていったのです。

しかし、公演を行うマインフランケン劇場の様子がわからないのでなかなか埒があかず、六月末、林さんをはじめ、音響・照明のチーフらと共に視察に行くことになりました。出発の日、運悪く台風の直撃で飛行機の乗り継ぎなどに四苦八苦し、松山からビュルツブルクまで、何と、五十時間かかってしまい、みんなクタクタでした。よって滞在は、一日しかできず、急ピッチで劇場の見学や、打ち合わせを行いました。

林さんは、初めての海外だったこともあり、美しいビュルツブルクの町に感激し、公演の時は、手伝いに奥さんも連れて来ると意気込んでいました。

しかし、予期せぬ出来事が起こりました。七月、林さんが突然、交通事故で亡くなりました。私は目の前が真っ暗になりました。「どうして、どうしてこんなことが・・。」二人も大切な人を亡くし、みんな、不安でいっぱいになりました。吉田委員長が言いました「お二人のご冥福を祈り、二日間、ドイツへの活動を停止し、また新たに出発しましょう。」。

その後、私は長崎にある、おイネさんのお墓参りに出かけました。「おイネさん、どうか私達を見守って下さい。お父さんの故郷に無事に導いて下さい。」手を合わせながら何度も何度もつぶやきました。何があっても、日独文化国際交流のこの事業を、もうストップさせることはできません。二人の舞台監督の意志を継いで、音響チーフの中村さんが舞台監督を引き受けてくれました。こうして、ドイツへ向かって再び動き出したのです。

八月、ドイツ側の主催者である、シーボルト協会のクライン・ラングナー理事長が来日しました。スタッフ会議の席上

クライン・ラグナー理事長との打合せ

で、理事長は言いました。「ドイツでは、このような日本のミュージカルが上演されるのは初めてです。歴史の一歩を記す事になるでしょう。苦難は多くあるでしょうが、頑張ってください。私達は、出来る限りの協力をします。」

その後、何度もドイツの新聞が送られてきました。「みかん一座がドイツ公演を行う」という記事です。こんなに期待されているんだと思うと、責任と緊張が増してきました。

心配していた資金は、西予市の特別協賛、国や県、松山市の助成金、県内の多くの企業の協賛、個人から寄せられた募金、そしてみかん一座の自己負担などで、公演真近に何とか目途がついてきました。子供達は、夏の暑い盛り、何度も街頭募金に立ち、道行く人達に大声で支援のお願いをしました。これは、お母さん達からの提案でした。「委員会の方達は、私達のために身を粉にして資金集めをして下さっている。その御苦労を少しでも子供達にわかって欲しい。大事なお金を募金していただく事の難しさやありがたさを身をもって感じさせたい。」そんなお母さん達の思いを大切にしたいと思いました。子供達の「ありがとうございました。」と深々と頭を何度も下げている姿はまぶしくさえ感じました。

土曜夜市での募金活動

資金集めと並行して、芝居の稽古は、休日返上で行いました。大人は仕事が終ってから夜遅くまでの練習。子供は、土曜日の昼。合同練習は休日しかできないのです。プロの劇団なら、短期間で出来てしまうだろう事も時間がかかります。仕事や学校や家庭を抱えながらそれぞれが必死で取り組んでいきました。特に印象的だったのは、小さな男の子達に相撲をとるシーンを与えたことです。日本らしいものを多く取り入れようと試みた事だったのですが、いざ始めてみると、相撲の取り方を知らないのです。大人組の男性陣が、昔とった杵柄で汗をかきながら教える姿は何とも微笑ましく、その結果、ドイツでは赤フンの小さな力士達に拍手喝采でした。

ドイツ公演に向け熱の入った稽古

また、みんなで取り組んだ事の中にドイツ語の勉強がありました。ドイツに行ったら、ドイツ語で挨拶できるように、そして、カーテンコールはドイツ語で歌おうと挑戦したのです。大人達は四苦八苦しましたが、子供達の何と覚えの早い事…。驚きました。

役者の中でも、予期せぬことが起こりました。重要な役に付いていた二人の女性が入院。楽しみにしていたドイツへは行けなくなりました。「どうしよう・・」私は、またまた頭を抱えました。思案の末、脚本を一部変更したり、役者の配置換えをしたり、バタバタとにかく本番に間に合わせました。右往左往の数ヶ月。語り尽くせないほど色んな事があった日々。みかん一座のメンバーは「どんな時も希望を捨てず・・。」と繰り返し叫びながら、ドイツ公演に向かっていったのです。

“MY TOWN„うぉっちんぐ

歩キ目デス&足ラテス

第31弾

西条モダニズム建築見て歩き

まちなみ探偵団
岡崎　直司

西条市は面白い町である。と言っても、ここで言う西条のエリアは、旧西条藩三万石の陣屋があった旧市街。実は昨年十一月から平成の大合併で、西条市、東予市、周桑郡小松町・丹原町が一緒になり、人口も十一万人台に倍増。市の概念がまだイメージ定着していない。余談ながら、歴史的にもそれぞれ微妙に西条藩・小松藩・松山藩だったりしてややこしい。

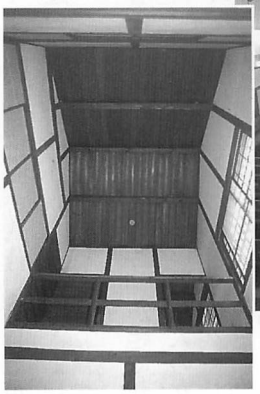
それはともかく、今号では、知られざる西条の魅力として、陣屋堀界隈の近現代建築を探訪する。

まずはここから。愛媛民芸館。西条陣屋の大手門を校門に持つ西条高校（今選抜甲子園出場）の左隣に、堀と柳の似合う現代建築が建っている。昭和四十二年の建築、倉敷で活躍した浦辺鎮太郎氏の設計作品である。このデザインは、浦辺調とも倉敷調とも呼ばれた浦辺独特の民芸調ネオクラシズムで、堀端の景観によくマッチしている。

愛媛民芸館

実は、もう一つ二つ彼の作品が近くに存在する。今度は西条高校の右隣、栄光教会と栄光幼稚園である。教会と牧師館の方は、民芸館よりも少し早く、昭和二十六年の建築。彼がクラレ営繕時代のもので、良質な初期作品と言える。残念ながら教会の入り口がサッシュドアになってしまったが、それでも中に入ると、会堂建築としての静謐さ気品が、今も少しも損なわれていない。足元を木煉瓦敷きとして、程よい採光のための縦長窓が絶妙なバランスで配置され、頭上には構造上の補強鉄筋（タイバー）を利用した当時のままのシックな照明具が今も健在。人が癒しを求めて集う宗教建築には、こうした優しさと身を正したくなる空間構成がとても大切だ。そんな具合だから、一方の牧師館だって小さな建物だけど、捨てがたい魅力にあふれている。伝統とモダニズムが調和した佳品の仕上がり。

栄光教会

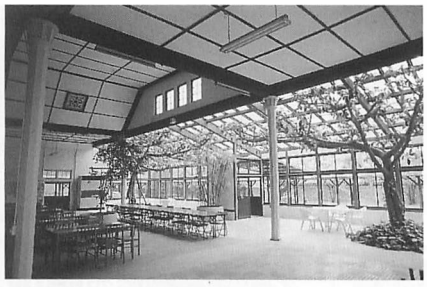


栄光教会牧師館

そして、幼稚園舎の方は、取材時に同行のW氏が気づく。かの松村正恒氏の戦後モダニズムの傑作日土小に似ているカーテンウォール形式の部分を発見。いや待てよ、こちらの方が先に建てられてるから、ひょっとして。両人とも戦後の日本におけるモダニズム建築家として、気を吐いた方々なので、影響しあったことが果たして有りや無しや。などと勝手な想像を巡らすのも実に楽しい。

さて、浦辺と西条との関わりについては、倉敷紡績の総帥大原孫三郎が、戦前

期にこの地に進出をみた旧倉敷絹職（現倉敷レーヨン西条工場）のことがある。それを引き継いだ惣一郎により、戦後、クラレ営繕時代の浦辺を西条に派遣した。大原惣一郎は、民芸運動など、企業家としてだけでなく、芸術的パトローネとしての幅広い素養の人であったが、倉敷に似た西条をこよなく愛したとされる。確かに、陣屋堀の界隈は、柳に　掘割と土塁、加えてかつては武家屋敷も近くの慈巷（しげるこうじ）などにズラリと並んでいて、あたかもその歴史空間は倉敷を髣髴（ほうふつ）とさせる。今となっては、武家住宅と呼べるものは絶滅状態で、一、二あるかないか。・・・・残念っ！


旧倉敷絹織食堂

旧倉敷絹織講堂

その代わり、その旧倉敷絹織には、今も戦前期の建築が現役で残る。昭和十一年、大林組の施工で完成した食堂、講堂などである。構内には、旧工場の廃材で造った煉瓦塀や、当時の若い寄宿女子工員の寂しさを和らげるために植えられたと言われる桜並木もあり、福利厚生の行き届いた大工場だったことがわかる。丁度今、年に一度の花見の頃には、市民にも開放され喜ばれている。

他にも西条には、特筆すべき戦後モダニズム建築がまだある。それは市内鷹丸にある昭和三十六年に建築の旧西条市民体育館。設計者は坂倉準三。氏は、かつてフランスへ渡り、今ブームとなっている建築界の巨匠ル・コルビジェに直接師事した経験を持つ建築家。そのRC打ちっ放しの大胆なフォルムは、建築が持つ〝形〟の力を感じさせる。曲面構成のあまりに複雑な屋根形状のためか、当初から雨漏りに悩まされた建物ではあったらしいが、その

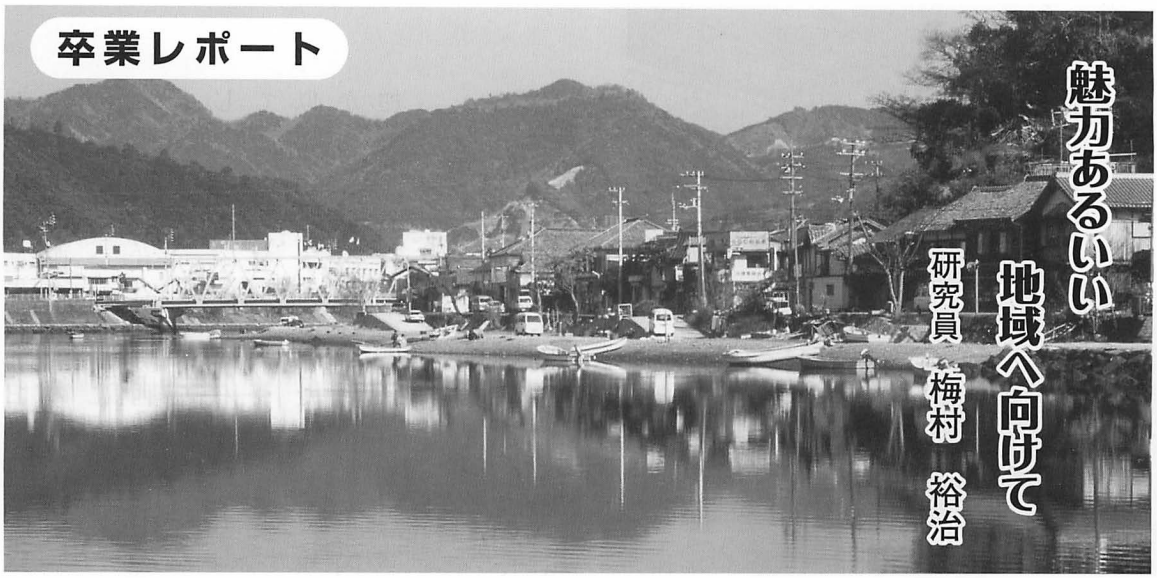
旧西条市民体育館

チャレンジフルな姿は、建築を学ぶ上では得がたい魅力がある。また、打ちっ放しコンクリートと言えば、今をときめく建築家安藤忠雄であるが、その作品も偶然この近くにあり、紹介しておこう。

坂倉の体育館から目と鼻の先にある光明寺である。水の都西条を意識した建物で、集成材とのシンプルで大胆な構成力は観ていて気持ちがイイ。こちらは平成十二年の作。

光明寺

こうして眺めてみると、西条には名のある建築家の作品が沢山存在する。そうした地力とも言うべきパワーが力のある人を呼び寄せるのか、はたまた偶然か。藩政時代の町並はかなりやせてしまったが、それでもこれだけの建築的魅力が群としてアチコチ点在する町はあまりない。他にもご紹介したいが、紙面の都合で割愛、ナゾと魅力は紙一重、これからも目が離せない西条である。



卒業レポート

魅力あるいい地域へ向けて

研究員　梅村　裕治

本当に過ぎてしまえば早いもので、二年間という貴重な派遣期間を残すところ数週間となり、卒業レポートを書きながら、『まちセン卒業』を実感しています。卒業と言えば聞こえはいいですが、まちづくりの実践に向けて、基礎体力作りからやっとスタート地点に向かうところです。以前、ある先輩から「まちづくりはスポーツで言えばフルマラソンみたいなもので、スタートに立つまでには相当の訓練が必要、その訓練もしないままスタート地点に立っていないだろうか。」との言葉を思い出すと「本当に大丈夫?」という不安もありますが、勇気を持ってスタート地点に立ちたいと思います。

地域への視点

まちづくり活動部門は、まちづくり情報の収集・発信が事業の柱にあり、県内外の数多くの実践者、活動者の方に会う機会がありました。その中で皆さんに共通して感じたことが地域の自然、文化、歴史、産業、地域性などを熱く語り、『自分のまち』を愛し、誇りをもっていることでした。話を伺っていると取材の予定時間を大幅に超え、二～三時間はあっという間に過ぎて行く、「なかなか大変なんだけど」と言いながらまちづくりへ注ぐパワーに圧倒されることがしばしばでした。では自分にその勢いがあるのかと言えば、まだまだこれからですが、まずは自分のまちの地域自慢というか、地域のPRや情報発信ができるように地域の個性を探していきたいと思います。センターに来て多くの地域を見てきた中で、改めて自分のまちの良さを探していきたいと思います。

危機意識

地域は今、とても厳しい時代を迎え、地域の課題が複雑多様化していることをセンターに来て強く感じるようになりました。環境では、自然にやさしい生活、環境を守ろうとする意識が必要であり、福祉にしても国の介護保険制度だけに頼っていても財源問題もあり、地域で助け合う仕組みも必要です。農林水産業についても商品価格の低迷や後継者不足など、きびしい状況が続いています。市町村合併についても住民の参画や協働が深く議論されないまま、行政区域が広くなる不安や、国、県、市町村ともに財政状況が厳しく、これまでのように公共事業には期待できない状況です。家庭環境につい

ても核家族化が進み、三世代同居世帯が減少し、高齢者世帯の増加など、家庭での助け合いが難しくなってきています。地域のコミュニティについても、住民の価値観は多様化して人間関係が希薄になり、人口の減少も進み、地域のコミュニティがとれなくなっているなど、地域の課題はとても多く「まちづくり」活動の必要性、地域にあるたくさんの課題にどのように対応していくのか、地域の力が試されています。どれも地域の中で複雑にからみあい簡単に解決できることではないですが、危機意識を持ちながら「地域をなんとかしたい」という思いからまちづくりがスタートし、地域で支えあい頑張っているまちづくりの先進地が多かったように思います。危機意識を持ち、地域が一つになって、地域を考えていくことが大切だと感じています。

自立と交流

がんばっている地域での先進的な取り組みや活動を見聞きするなかで、地域はこれからどうしたらいいのか?と考えたときに、「住民主体のまちづくり」が必要になっていることを感じました。行政が広域化するなか、地域はどのように自立していけばよいのか、地域の中で行政任せになっていたことも、一度地域に戻して、住民が主体となり、地域でできることは地域で行い、どうしても出来ないことを住民と行政とが協働して、地域を作っていくべきです。まちづくり携わり、本当に地域を良くしていくことができるのは、そこに暮らす住民だと感じました。

そして、地域を元気にしていくには、外との交流も大きなテーマです。地域の情報を発信しながら、地域の応援団づくりをどのようにして行うか。地域は外からの人に見られることにより変わってきます。地域に足を運んでもらえる、行ってみたくなる仕組みづくり、言葉では簡単に言えますが、魅力ある『いい地域』へ向けて何ができるのか考えていきたいと思います。

※『いい地域』とは、①海、山、川などいい自然があること。②いい習慣があること。③いい仕事があること。④少しのお金でも笑って暮らせる生活技術を教えてくれる学びの場があること。⑤ 住んでいて気持ちがいいこと。

〈宮城県仙台市で地元学を実践する結城登美雄さんの言葉より〉

……※……※……※……※……

「まちづくりは育自である。」との先輩研究員の卒業レポートに書かれていた言葉。自分はこの二年間でまちづくりの中で育てられてきたことを実感しています。地域への視点や環境への視点がもてたこと、地域の個性である伝統や文化の習慣などの大切さに気づけてことなど、自分の視野を広げることが出来たことです。これからもまちづくりのアンテナを伸ばしながら、この二年間学んできたことを今後、掘り下げていければと思っています。

最後になりますが、この二年間みなさんに助けていただきながら、楽しく『まちづくり』に携わることができました。センターは本当にお世話になりました。センターは離れますが、これからも厳しくご指導下さい。お願い致します。

平成17年度　地域づくりホームページ作成講習会
受講生募集

当センターでは、愛媛県の委託を受けて、地域づくり団体を対象として「ホームページ作成講習会」を開催します。
そこで、地域づくり団体の中で、今後自分たちのホームページを開設して、地域から情報発信をしようと考えている方々の参加をお待ちしております。

◆開催時期
○７月の土曜日と日曜日の２日間（予定）
○松山市内（昨年は愛媛県生涯学習センターパソコン演習質で開催）

◆内容
○パソコンが苦手な方でも2日間の講習で、ＨＰ制作ソフトを使って、所属する地域づくり活動のＨＰが開設できる実践的な講習会です。

◆募集人数及び応募資格
○県内の地域づくり団体関係者（5団体程度）
○１～２団体２～３名程度の参加とします。
○受講料は無料です。

◆応募方法と締切
○直接または市町、関係者を通じて、必要事項を記入（様式自由）の上、申し込みください。
○６月１７日（金）

（お問い合わせ・申込先）
財団法人　えひめ地域政策研究センター
〒７９０－０００３　松山市三番町4丁目10番地１　愛媛県三番町ビル2階
TEL　089－932－7750　　FAX　089－932－7760
E-mail: info @ecpr.or.jp

●民俗の知恵　愛媛八幡浜民俗誌

大本 敬久　著　　創風社出版　　1,365円（税込）

県歴史文化博物館学芸員の大本敬久学芸員が民俗の宝庫・八幡浜地方、そこで学ぶ伝承文化の知恵を紹介。
亥の子・柱祭り、神楽、鹿踊等々の祭事から何気ない風習・文化・風俗まで、八幡浜をフィールドに、そこで伝承されてきた様々な見聞を出発点として、その歴史性、地域性、社会性を考えています。
地域の民俗を学ぶことにより、郷土の良さを再認識できる一冊です。

Ⅰ　民俗とは何か- 序にかえて-
Ⅱ　人の一生
Ⅲ　年中行事
Ⅳ　祭りと芸能
Ⅴ　口頭伝承
Ⅵ　俗信・信仰・祈願
Ⅶ　暮らし
Ⅷ　おわりに- 「民俗」の現在・未来-

Information センターからのお知らせ

平成17年度　地域づくりコーディネーター育成研修会
受講生募集

☆県内各地から地域づくりリーダー等の受講生を募り、コーディネーターとしてのスキル向上を図るための実践的な研修を通じて、行政と住民の橋渡し役を担う人材を育成します。
☆研修生同士はもとより、講師、センター関係者等を含め、将来にわたる幅広いネットワークの構築を目指します。

◆研修期間
平成１７年６月から平成１８年１月までの間で、年間６回程度の開講を予定しています。

◆内容
ワークショップ講座や地域づくり実践者のアドバイザーを招いた講習、ＨＰ作成講習（希望者のみ）、現地研修など実践的な研修にする予定です。

◆募集人数及び応募資格
○２０名程度
○地域づくり団体のリーダー等

◆応募方法と締切
○直接または市町、関係者を通じて、当センターまでお申込下さい。
○５月１９日（木）
○受講料は無料ですが、研修会場までの旅費は自己負担となります。

（お問い合わせ・申込先）
財団法人　えひめ地域政策研究センター
〒７９０－０００３　松山市三番町4丁目10番地１　愛媛県三番町ビル2階
TEL　089－932－7750　　FAX　089－932－7760
E-mail: info @ecpr.or.jp

BOOK　INFORMATION

●えひめ地名の秘密　～地名でわかる愛媛の自然と合併の歴史～

土井中 照　著　　アトラス出版　　1,200円（税別）

地名は人々の営みの中、長い時間をかけて育った平成の大合併により、多くの地名が失われ、慣れ親しんだ地名が消えてしまっています。地名を紐解くと、そこには地域独特の歴史や文化が溢れ出します。

地名の語源だけでなく、人の暮らしや文化、歴史などを交えながら地名にまつわる意味をここでは紹介しています。

「平成の大合併」をはじめとする市町村の合併の歴史から、地名に関する歴史、地域の語源まで愛媛の地名の歴史をコンパクトに凝縮しています。

第１章／市町村合併の経緯
　　明治から平成にかけての「大合併」の事例
第２章／愛媛の歴史と地名
　　古代・中世・近世・近代における地名成立の歴史
第３章／地名・町名アラカルト
　　山・川・水・海・平野・動物・数字など地名の語源
第４章／愛媛の地名小事典
　　自治体別に紹介する地名の語源や伝承

● 媛のくにフラッシュ ●

亀ヶ池温泉（仮設施設）

伊　方　町

平成16年11月４日にオープンした伊方町二見の亀ヶ池温泉仮設施設。

愛媛県最大の潟湖（ラグーン）である同町亀ヶ池周辺の観光開発の目玉として、15年11月、掘削に成功。現在の仮設施設では、石鹸等の使用はできないものの、酒樽を湯船に利用した露天風呂や足湯があります。

平成18年秋完成予定の本格施設には、一般風呂のほか、家族風呂、岩盤風呂、健康バーデプール、サウナがあり、１階には物産館を併設し、２階にはレストランとリラクゼーションルームなどができる予定です。

伊方町へお越しの際には、ぜひ亀ヶ池温泉をご満喫下さい。

営業時間：午前10：00～午後8：00（年中無休）

利用料金：仮設浴場　町民100円、町外者200円
足湯　　無料
温泉スタンド　100円（100リットル）

問い合わせ：亀ヶ池温泉　☎ 0894-39-1160

亀ヶ池温泉温浴施設完成予想図

― 春は移動の季節です ―

後列左から　研究員 ☆兵頭利樹（津島町）　研究員 ☆脇田弘樹（愛南町）　研究員 清水和繁（全農愛媛県本部）　研究員 鵜野大作（四国中央市）

前列左から　事務員 ☆高橋京子　専務・所長 ☆青野泰彦　常務・統括部長 丹羽由一（日本政策投資銀行）　主任研究員 井石　憲雄（愛媛県）

平成17年度、えひめ地域政策研究センターのまちづくり活動スタッフは、１名増え、左記のスタッフで活動します。

（☆は新しいスタッフです）。

昨年度までの２年間、当センターで勤務していた梅村研究員は津島町役場に帰られました。

これからも客員研究員としてよろしくお願いいたします。

編集後記

今年一月、愛媛県から村が消えました…。市町村合併により自治体の中で村がなくなり市や町となったためです。私自身、このことがどのような意味を持つのか分からぬまま、ただ漠然とした一抹の寂しさを感じます。

村を盛り上げるためにおこなってきた懸命な取り組みや築きあげてきたブランドは、何処へ行くのでしょうか？

時間とともに過去のものにならないよう、まちづくりに関するアンテナをより大きく、網目をより小さくする必要があると思う今日この頃…。

（鵜野）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

〒790-0003
松山市愛媛県三番町四丁目十番地一
(財)えひめ地域政策研究センター
まちづくり活動スタッフ
TEL089(932)7750
FAX089(932)7760

発行／平成十七年四月十二日
(財)えひめ地域政策研究センター
印刷／三創印刷株式会社

☆http://www.ecpr.or.jp　☆E-mail:info@ecpr.or.jp

本紙は、(財)愛媛県市町振興協会の委託を受けて発行しています。